

生徒指導通信

新潟県立三条東高等学校

生徒指導部

令和2年9月2日 No.5

○「いじめの直し方」～著：内藤朝雄・荻上チキ～

今回はいじめについて深く考えて見ましょう。「いじめの直し方」という本から気になる部分を抜粋しました。当事者となって考えながら読んで理解し、いじめを見逃さない行動へとつなげましょう！機会があったら本を手に取り、全部読んで見てください。

○学校はいじめの起きやすい場所

先生が教壇で、優しく言う。「クラスみんな、仲良くなさい！」

仲良くだって？それはむずかしいよ先生。だってあいつを見ているとイライラしてしょうがないんだ。だからとりあえず、先生の前でだけは、何事もないようにしておくよ。でも、見えないところでは自由にやれるからね。あいつへのイライラは、先生の見えないところでぶつけるんだ。さて、この授業が終わったら、みんなと相談しなくちゃ。あいつをどうやっていたぶればいいのかをさ…。

学校では、いじめは「あってはいけないこと」とされている。でも、僕たちは知っている。「学校はいじめが起る場所である」ということを。そして「学校は、他の場所にくらべても、はるかにいじめが起りやすい場所である」ということを。

そこで、ちょっと考えて見よう。なぜ、特に学校でいじめが起きやすいんだろう？学校に通っている子どもたちが未熟だから？教師が未熟な子どもたちをきちんとしつけられなかったから？

そうしたことも、もちろん理由になっているだろう。でも、それだけが理由のすべてじゃない。ちゃんとしつけられた大人はいじめをしない？いいや、大人どうしだっていじめをするし、偉い人同士だって言い争ったり差別したりする。教師がいじめに参加することだってあるし、教師同士でもいじめが起きることはあるじゃないか。ということは、ほかにも原因が考えられるはずだ。

○いじめを「事故」として見てみよう

ところで、ある道路で、何度も繰り返し交通事故が起きていたら、君はきっこう思うんじゃないかな？「その道路は事故が起りやすいようにできている。だから、何か対策をしなくちゃいけない」って。もちろんドライバーの心がけや運転技術をあげる努力も大事なことだ。だけどそもそも道路の危険なら、その環境を変える努力も必要になる。例えば、ミラーをつけたり、信号機をつけたり、ガードレールをつけたり、交通ルールを変更したりね。

だって、「一人ひとりの運転をうまくする」のはとても大変な作業だし、すごく時間がかかる。だけど、環境を直すのは、意外と簡単で効率的。しかも、ドライバー一人ひとりに「事故を起こさないでね」と言ってまわらなくても、環境そのものを変えることで、**運転が下手な人でも事故を起こしにくくすることができるんだ。**

これは、いじめについても同じことが言える。いじめというのは、**人と人とのコミュニケーションが引き起こす事故のようなもの**。事故はなくすことはできないけど、減らすことはできる。だからもし、いじめが起きやすい環境があったなら、その環境を直さないといけないんだ。

「みんなでいじめをやめればいい」と言うだけなら簡単だよ。テレビでも新聞でも、いつでも「いじめは止めましょう」って叫んでいる。だけど、そうした約束は簡単に壊れてしまう。だから、いじめはいつまでもなくなるんだ。もちろん、他人をいじめないように注意するのも、とっても大事なこと。だけど、そうした説得や説教は、教師や大人の「腕次第」になっちゃうし、その多くは失敗してしまっている。

だから僕たちは、いじめを発見したら、その空間をいじめが起きにくいようにする努力をしなくちゃいけない。モラルが低い人とか、人より意地悪な人といったような、**心の運転が下手な人でもいじめをしにくいような環境にすることが必要なんだ。**

○飼育としてのいじめ

誰かあいつをいじめ始めたのか、あんまりよくおぼえていないんだ。でも、気づいたらみんなでいじめていた。今じゃ、誰かがあいつに絡み出すと、周囲がニヤニヤしながら、「何か起こらないかな」って感じで見守っている。退屈な学校でのちょっとしたイベントなんだよ。小さなお祭りってやつ？何が楽しいって、みんなでいい加減な理由を作り上げながら追いつめていくこと。即興の劇でもやるような感じで、目配せしながら「あいつを見えないフリしようぜ」とか「バイ菌扱いしようぜ」って決めていくんだ。チームワークが試されている感じが、なんとも言えないんだよね。

でも、今日はAがいないんだ。つまんないの。誰か、Aの代わりに楽しませてくれる人、いない？

「いじめ」はなんのための手段なんだろうか。気に入らない人を追い出すため？確かにいじめというと、「自分とは違う人を排除する」というイメージがあるかもしれない。でも、いじめの多くは、実はもっとたちが悪いんだ。多くのいじめは、排除のためじゃなくて、飼育のためにおこなわれている。「嫌いなヤツ」を追い出すためではなく、相手を「弱いヤツ」のままにさせて、オモチャのようにして攻撃し、反応を楽しみに続けることを目的としているんだ。

例えば使いつパシリなんか典型的だよ。パシリが学校にこなくなると、いじめっ子は困る。だっていじめは、退屈な学校における大事な暇つぶしだから。いじめていると楽しいし、面倒なことを押しつけることもできる。だから、一番の下っ端として、逃げない程度に、裏切らない程度に、ずっと気持ちいい気分ですられるように、飼育ならそうとするわけだ。特定の相手を、根拠も何もなく、ずっと長い間、そのメンバーの中で一番低い地位でいさせること。それがいじめの怖いところなんだ。

○悪いノリは感染する

朝、学校に行くと、昨日まで仲良くしていたみんなが、突然自分を無視するようになっていた。誰に話しかけても、口を聞いてくれない。誰かが「あいつを無視しよう」って決めたとと思う。これからいじめがはじまるのかと思って落ち込んだんだけど、翌日にはみんな、何事もなかったかのように話しかけてきた。戸惑っていると、ひとりのクラスメイトが近づいてきて、僕にこう言うんだ。「昨日は面白かったよ。今日はあいつの番だから、よろしくな」って。

僕たちの大きな社会では、「人をいじめることは悪いこと」と思われている。でも小さな集団が作り出す「ダメなおキテ」は、いじめを「いいこと」にしてしまう。職場や学校、地域やウェブサイトの中で、「誰それをたたくのは善」といったムードが高まってしまふ。

ところが、いじめをしている人に、「いじめについてどう思う？」と尋ねてみたら、「悪いことだと思う」「やってはいけないこと」と答えるんだ。つまり、普段は「いじめはいけません」と言える人が、別の場面では、いじめを平気な顔でしたりするわけ。

「いじめを悪いこと」という発言をするときは、その人は「広い社会のルール」に合わせた発言をしている。でも、いじめをするときは、自分たちだけの「ダメなおキテ」を作り、それに従って行動している。彼らは、ノリやルールを使い分けている。普段は普通につきあっているんだけど、ふとした瞬間に、いじめをするような悪いノリにかかわってしまうんだ。

そうした、いじめを肯定してしまうような悪いノリは、人から人へと感染してしまう。今まで普通に接していた友達のことを、みんなが何となく低く評価したり、シカトしたりすると、「あいつ嫌い」「叩いてもいい」というノリが伝染ってしまうんだ。そうすると、とたんにいじめが始まり、誰も止めなくなってしまう。

逆に、そうゆうノリが冷めると、いじめをやめるのもあつという間、誰かがいじめに飽きると、誰もが次から次へといじめをやめて、離れていくということもしばしば起こる。

いじめをすることに、信念やこだわりなんてほとんどない。いじめに参加していた中心人物でも、数年後にはケロリと忘れ、たまに思い出しても「なんであんなことしてたんだろうね、あはは」と、どこ吹く風。でも、いじめっ子にとっては一時のノリでも、いじめられっ子にとっては一生の傷になるんだ。

新潟県立三条東高等学校 生徒指導部 係：坂爪

TEL 0256(38)6461



学校ホームページ QR コード

以前の生徒指導通信も掲載されています